

[講演要旨] 李朝肅宗七年(1681)韓国東海岸の地震による 雪岳山神興寺繼祖窟付近の岩石崩落痕跡

韓国歴史地震研究会 秋教昇
東京大学地震研究所 都司嘉宣

李朝の根本史料「朝鮮王朝(李朝)実録」の記載によると、朝鮮半島の地震活動は 17 世紀後半に 1 つのピークを迎えていることがわかる。その中でも最大の地震は、朝鮮王朝(李朝)実録の肅宗七年五月癸亥(1681 年 6 月 26 日)の江原道の被害地震である。筆者らは、その地震記事中に記された神興寺などの地点を訪問する機会を得て、現在に残るこの地震の痕跡を子細に観察する機会を得た。原文は次の通りである。

- (1) 京畿広州地震、江原道地震、声如雷。墻壁頽圯、屋瓦漂落。<京畿道広州、および江原道で地震があった。雷のような音がした。壁は壊れ倒れ、家屋の屋根から瓦が飛び散り落下した。>
- (2) 襄陽海水震蕩如払
襄陽(Yangyang)の海岸では海水が震蕩し、「払うようであった」(海水が退いた? 箒で払ったようになった?)。津波を伴っていたことを示している。
- (3) 雪岳山神興寺及繼祖窟巨巖俱崩頽
雪岳山(Seolak-san)の神興寺(Sinheung-sa)と繼祖窟(Gyejogul)がともに巨岩が崩れ落ち崩壊した。

この文に言う「雪岳山」(1708m)は日本海岸に面した江原道の束草市の南西約 15km にある韓国屈指の名山であるが、神興寺はその北側の双川(Ssang-cheon)の谷の中に大きな伽藍が現存する名

刹である。その寺のある地点は北からの支流が流れ込む地点であるが、そこから約 3km 北支流をたどると、約 80 分の登山ののち繼祖庵(Gyejo-am)という自然石の巨岩のなかにうがたれた石室寺院に達する。これが上の記事に言う繼祖窟である。この地点の標高は約 350m と地図から判読することができる。この石室寺院のすぐ北側には「蔚山岩(Ulsan-bawui)」と呼ばれる、妙義山のような鶏冠状に巨岩が約 1.5km にわたって峰をなす地形があり、その最高標高は 875m である。繼祖庵の付近は蔚山岩から滑落してきたと見られる巨岩が散乱しており、これらの巨岩が上の記録に言う地震による滑落の結果と理解することができる。繼祖庵の前面には、舞台上の巨岩の上に「揺るぎ石(巨岩の上ののった岩で、とても人力では持ち上げることはできないが、揺ると岩を振動させることのできる岩)」がある。この「揺るぎ石」には文字が書かれており、「觀察使権是經、江陵府使申厚命、襄陽府使安堂、杆城郎中鄭寿俊、戊辰四月望日」とある。ここに現れる觀察使などの実在性は、「李朝実録」などの記録で裏付けられ、「戊辰」は 1688 年であることから、地震の七年後にこの地方の長官たちがここを訪れたことが判明する。さらに、この「揺るぎ石」地震が地震によって蔚山岩からの落石で生じたことを裏付けている。